

アメリカの場面緘黙不安研究治療センター（スマート・センター）の資料です。  
日本では「場面緘黙」の理解や治療体制が大変遅れています。  
この資料を日本で使われる時は、日本の現状を考えた上で参考にされることをお勧めいたします。

原文：” Understanding Selective Mutism as a Social Communication Anxiety Disorder ”  
Selective Mutism Anxiety Research and Treatment Center (SMart Center) のHP  
<http://www.selectivemutismcenter.org/>の Handouts! をクリック

資料: 配布してください!

場面緘黙を説明するために、この情報を先生や家族、友達、専門家にお伝え下さい。

E. シボンブラム博士 著

場面緘黙不安研究治療センター (SMart センター) 代表・所長

場面緘黙グループ小児期不安ネットワーク (SMG ~ CAN) 最高責任者・医学管理責任者

フィラデルフィア オステオパシー医療大学 家庭医学・心理学 臨床助教授

## 場面緘黙を不安障害として理解するために ~SM-SCCS を用いて

場面緘黙、つまり、”selective (選択的) mutism (緘黙)” という名称からは、「沈黙している」子ども達の抱える主な、そして唯一の問題は「話すことができない」ことであるという印象を受けます。そのため、場面緘黙の治療や理解の焦点は「いかにして子どもに話をさせるか」におかれることが多いのです。

残念ながらこれは不適切な方法であり、その子どもをいっそう不安にさせ、欲求不満を起こさせることにしかりません。

緘黙児の特徴をよくつかみ、社会参加する力やコミュニケーション能力を調べてみるとわかるのですが、そうした子どもたちの多くは不安で落ち着かない時、言語的にはもちろん、非言語的にもコミュニケーションできなくなります。その結果、緘黙児は適切に社会化されず、コミュニケーション能力は損なわれてしまいます。

ですから、不安を感じ恐怖に立ちすくんでいる緘黙児を本当に支援しようとするなら、まず様々な社会的状況での「コミュニケーション不安」の程度を調べる必要があるのです。

そこで、次のコミュニケーションにおける安心感尺度の「**緘黙のステージ**」(SM-STAGES of COMMUNICATION COMFORT SCALE c、以下 SM-SCCS) がたいへん役に立ちます。これを使えば、緘黙児との取り組みの中で、その子がどのコミュニケーション段階で困ることが多いのかを判断できます。

SM-SCCS では、コミュニケーションを「応答」と「働きかけ」の2種類に分け、そしてコミュニケーションを3つのステージに分けて示しています。

ステージ 0	-	コミュニケーションの欠如
ステージ 1	-	非言語的応答 (1a) と非言語的働きかけ (1b)
ステージ 2	-	言語的応答 (2a) と言語的働きかけ (2b)

緘黙児の示す不安の水準は様々です。周りの状況や、一緒にいる人が異なれば、その子の感じるコミュニケーションの安心度のステージも違います。

例を挙げましょう。

ある緘黙児は、家や学校の外にいるときは友達と普通に会話（応答、および働きかけ）ができます（ステージ2）。しかし学校にいる時は、友達には非言語的なコミュニケーション（うなずき、指差し）を使ってしか返事ができなくなります（ステージ1a）。

ある緘黙児は、クラスにいる時、友達に「小さな声」で応答します（ステージ2a）。しかし、先生に質問をされた時は、黙って硬直し、無表情で、応答もできません（ステージ0）。

ある緘黙児は、学校にいる時、しゃべることはできませんが、友達には応答や働きかけができ（ステージ1）、先生にも反応はできます（働きかけはできません）（ステージ1a）。しかし、友達と約束して遊ぶときには非常におしゃべりになります（ステージ2）。

多くの方がよく困惑してしまうのは、緘黙児はある状況では話すことができ、別の状況では話すことができないということです。外部の人や場面緘黙について理解していない人は、その子が反抗しているとか、言葉を発することを『拒否』していると受け取ることになりかねません。

実際には、緘黙児の不安の水準は状況によって変化します。その子が安心してコミュニケーションできるかどうかによって、その子が自分の力を適切に発揮できるかが決まります。言い換えれば、コミュニケーションが上手くとれない子どもは、社会的にも学力的にも自分の力を発揮できず、情緒の安定がおびやかされ、機能不全のまたは不適応なコミュニケーション方法を身につけているのです。このようなコミュニケーション不安を克服するため、こうした子どもたちには専門家の支援が必要となります。この子たちは反抗的になっているわけではありませんし、『扱いにくい』子どもでもありません。この子たちにとっては、適切な社会的交流やコミュニケーションをとることが本当に難しいのです。

例えば、友達に話しかけることはできるのに、先生の質問には答えられない子どもがいます。教育者の中にはいらだって、場面緘黙児は反抗的で挑戦的だ、と考える人も少なくありません。しかし実際は、先生が質問した時に、その子のコミュニケーション不安が急激に高まってしまっているのです。このことを理解して初めて、その子が不安を克服するのを支援できるようになります。この場合、この子は友達とコミュニケーションをとる場合には**ステージ2**にいますが、先生とのコミュニケーションでは**ステージ1**にいるのです。この場合の治療の目標は、その子がステージ1からステージ2へと徐々に進んでいけるよう働きかけることです。まずは、「非言語的な応答」と「非言語的な働きかけ」を目標に取り組みることになります。言語化は、子どもが安心できているかどうかを考慮しながら、はっきりとした目標を持ってこうして取り組むことで、最終的に達成されるのです。

非言語的コミュニケーションから言語的コミュニケーションに進む時は、多くの場合、まずその子が話すことのできる状況を用意し、そしてその話せる状態を次の状況へと移していく、という方法が必要となります。こうした発話の移行は、**言葉の橋渡し役**（verbal intermediary）を介して行われることもあります。

橋渡し役とは、子どもが話しかけることのできる人のこともあるし、それをもち込むことでその場所での言語化を助けたり、別の人に言語化しやすくするもの（動物の人形、指人形、「握りこぶし」）のこともあります。例えば、誰かが挨拶や質問をした時に、子どもはまず言葉の橋渡し役、例えば母親に小さな声で話すことから始めたりするのです。時間が経つにつれて、だんだん言葉の橋渡し役に小声で話す距離が延びていきます。これは全て、その子どもの安心感の程度やこの方法を使う能力を考えて行なわれます。

場面緘黙を**コミュニケーション不安という観点**から見ると、黙り込んで『硬直』している、交流のできない子どもに話すことを求めるのは、その子をさらに不安にさせることにしかならないことは明らかです。社会的コミュニケーション不安の治療（S-CAT）は、緘黙児が社会に参加し、適切にコミュニケーションできるようになるまで、緘黙児がある段階から次の段階へと進むのを支援するために、（適切な治療専門家の指導のもと）目標を持った小さなステップをふむことを可能にします。

以上のことから、不安を測る時に「緘黙のステージ」を指針として用いることが、査定・評価・治療をする際にとっても**重要**になるのです。

## 緘黙のステージ (SM-SCCSc)

著作権：E.シポンブラム博士

場面緘黙不安研究治療センター (SMart センター)

### コミュニケーションが欠如している場合 (非言語的にも 言語的にも) **緘黙**から

**ステージ0**：応答なし、働きかけなし

子どもは立ったまま動かず、無表情で硬直した様子です。

### コミュニケーションがみられる場合

(言語的にも非言語的にも、あるいはどちらか一方で)

#### 非言語的コミュニケーション

**ステージ1a**：応答 (指差し・頷く・書く・手話を使うなど)

**ステージ1b**：働きかけ (指差しによって誰かの注意を引く・手を挙げるなど)

ステージ1 ステージ2へ進むには、  
言葉の橋渡し役が必要な場合があります。

#### 言語的コミュニケーション

**ステージ2a**：応答 (『どんな声でもよい』ぶつぶつ声・片言・動物の鳴き真似  
うめき声・微かなささやき・発話など)

**ステージ2b**：働きかけ (何か声を出すことで誰かの注意を引く)

**発話**へ

(注1) 言葉の橋渡し役：橋渡し役とは、それをもち込むことで子どもがその場所で発話するのを助けたり、別の人に話しかけやすくする人や物 (動物の人形、指人形、『握りこぶし』) のこと。

(注2) コミュニケーションにおける安心感は、場所によって、また人によって変化します。つまり子どもが、ある人に対してある状況では安心して話すことができても、別の状況になると話せなくなったり、コミュニケーションがほとんどとれなくなることがあります。

(訳者注1) 言葉の橋渡し役 (物の場合)：ちいさい子どもの場合、ぬいぐるみを机の上に置いたり横に座らせたり、指人形を指にはめたりします。ぬいぐるみを子どものお友達にして、家で人形に話す練習をして、レストランやお店や学校に持って行って、その人形に向かって小さな声で話しかけるようにさせます。初めは人形にくっついてささやいていたのが、少しずつ距離がのびても平気になり、テーブルを挟んだ距離くらいでも声が出るようになっていきます。少しずつ人形を介して他の人と話をするようにしていけば、最後には他の人に対しても声が出せるようになるでしょう。また、相手の方を向き、目を見て返事が出来るよう少しずつ促していきます。年上の子どもは、握り拳や指の1本を人形に見立てたり、ちいさい人形を手のひらの中に握るのもよいでしょう。

言葉の橋渡し役 (人の場合)：保護者やすでに話すことができるお友達を「言葉の橋渡し役」にして間接会話を促しましょう。例えば、お友達の問いに子どもが直接答えられない時は、緘黙児は母親に小声で答えて、それを母親がお友達に返します。初めは、お友達から見えない部屋の隅や別の部屋まで行く必要があるかもしれません。次第に子どもは母親の耳元で小さな声で答えたり、母親に向かって話すのを友達に聞かれることを嫌がらなくなります。子どもに意識させないで、だんだんと声が大きくなるよう母親との距離を離していき、お友達に直接答えるようにしていきます。

(訳者注2) 本論文の題名は "Understanding Selective Mutism as a Social-Communication Anxiety Disorder" ですが、日本人にはなじみが薄く長い用語であるため、日本語では「場面緘黙を不安障害として理解する～SM-SCCSを用いて」としました。

(訳者注3) 原文1ページ下から3行目 stage1a を stage1 に、下から2行目 stage1b を stage1a に、翻訳チームの判断で訂正して翻訳しました。

(訳者注4) "SM-STAGES of COMMUNICATION COMFORT SCALE" を簡略化し「緘黙のステージ」と訳しました。

著作権：SMART-CENTER and Dr. E Shipon-Blum©.

翻訳：Knet 翻訳チーム (2006年9月公開)

かんもくネット (Knet) <http://kanmoku.org/>